平成 27 年度開催

本目遺跡発掘 20 周年記念
あさぎり町まちづくりシンポジウム

時間・空間・人間とまちづくり
～過去から未来へのまなざし～

－講演録－

あさぎり町教育委員会
2022（令和 4）年 9 月

目　次

１．開会・主催者挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

２．第１部　記念講演
（１）文化遺産とまちづくり（西村幸夫）・・・・・・・・・・・・・ 3

（２）あさぎり町の魅力と課題（中川幾郎）・・・・・・・・・・・12

３．第２部　事例報告
（１）本目遺跡と“クマソ復権”（佐古和枝）・・・・・・・・・・20

（２）身近な景観が歴史と現在をつなぐ（河森一浩）・・・・・・23

（３）遺跡、ワークショップと芸術活動～あさぎり町の事例～
（犬童賢二）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

（４）遺跡、ワークショップと芸術活動～南種子町の事例～
（石堂和博）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

４．第３部　パネルディスカッション「文化遺産とまちづくり」・・31
コーディネーター：中川幾郎
パネラー：愛甲一典、西村幸夫、藤島紘陽、犬童賢二
浦本真道、佐古和枝

５．閉会・挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37

【おことわり】

本講演録は、平成 27 年 8 月 23 日（日）にあさぎり町須恵文化ホールで開催されたあさぎり町まちづくりシンポジウム「時間・空間・人間とまちづくり～過去から未来へのまなざし～球磨のしあわせ小宇宙」の講演・報告内容をまとめたものです。

講演者等の役職は、講演日当時のものです。

１．開会・主催者挨拶

司会進行：沖松勝彦（あさぎり町役場農林振興課　主幹）

○沖松勝彦主幹（以下　沖松主幹）

皆さん、こんにちは。本日は、本目遺跡発掘調査 20 周年記念として、～過去から未来へのまなざし～をテーマに開催いたします、「時間・空間・人間とまちづくりシンポジウム」に多くの皆様に御来場いただき、誠にありがとうございます。それでは、ただいまより、まちづくりシンポジウムを始めさせていただきたいと思いますが、本日の司会進行を務めさせていただきます、今から 20 年前に本目遺跡発掘調査に関わらせていただき、本シンポジウムの実行委員メンバーの一員であります、あさぎり町役場農林振興課、沖松と申します。どうぞよろしくお願いいたします。それでは開会を、シンポジウム実行委員会の浦本秀正が申し上げます。

【開会】

○浦本秀正氏

皆様こんにちは。本日は、まちづくりシンポジウムに御参加いただきまして、心から感謝、御礼申し上げます。私は、旧免田町の公民館長をしておりました浦本と申しますが、私が 20 年前に公民館長をやっておりました時に、旧免田町でクマソ復権の機運が高まりました。それは、日本でわずか 3 枚しか出土例がないという、才園古墳出土の鑾金鏡（註 1）の鑑定のために、中国の鏡の第一人者、王士倫先生、それから、国内の考古学者の森浩一先生、そして古代史の作品を多く手がけられました、黒岩重吾先生を招いたシンポジウムが行われました。

相前後してはじまったのが、免田式土器の発掘調査でございます。旧免田町の本目遺跡の発掘を指導された佐古和枝教授、八賀晋教授、そして本日、遠くから来ていただきましたけれども、当時学生であられた、京都府宮津市の河森さん、鹿児島南種子町の石堂さん、そして、奈良県大淀町の松田さん、大阪の梅野さん、喜界島の松原さん、この方々を初め、多くの研究者や、学生、そして地元のおばちゃん達のおかげで、2 年間以上の歳月をかけて発掘調査していただき、免田式土器が 1700 年の眠りから覚め、日の目をみることができました。

あれからちょうど 20 年が経ちました。20 年前から変わらぬ情熱を持ってこのあさぎり町を誰よりも愛し、町の将来を誰よりも心にかけてくださっている関西外国語大学教授の佐古和枝先生のおかげで、本日、東京大学先端科学技術研究センター所長であり、日本イコモス国内委員長であられます西村幸夫先生、それから地方分権、国際交流などの幅広い分野で活躍中の帝塚山大学名誉教授であられます中川幾郎先生をお招きすることができました。第 1 部の記念講演、第 2 部の事例発表、第 3 部のパネルディスカッション、どうぞ最後までご参加いただきますように、お願いいたしまして、開会のご挨拶とさせていただきます。今日はどうぞ最後までよろしくお願いいたします。

〇沖松主幹

続きまして、本日のシンポジウムの主催者を代表して、愛甲一典、あさぎり町長がご挨拶申し上げます。

【主催者挨拶】

〇愛甲一典町長（以下　愛甲町長）

皆様、こんにちは。あさぎり町長の愛甲でございます。本日は本目遺跡発掘調査 20 周年を記念して、「時間・空間・人間とまちづくり～過去から未来へのまなざし」ということで、シンポジウムを開催することになりました。今年は、人吉球磨の「相良 700 年が生んだ保守と進取の文化～日本でもっとも豊かな隠れ里」が、日本遺産に認定されたこともあり、歴史遺産を活用したまちづくりは、私達、あさぎり町にとっても、直近の大きな大事な課題だと考えております。このような時期に、日本イコモス国内委員長の西村幸夫先生と、文化政策やまちづくりでご高名な中川幾郎先生をお迎えし、本目遺跡発掘調査団の皆さんや、町内の有識者の皆さんと歴史遺産を活用したまちづくりについて、さまざまなご指導やご提言をいただけることは大変ありがたく、ここに感謝申し上げるところでございます。

さて、このあさぎり町は、本目遺跡や才園古墳、鬼の釜古墳、新深田の石室古墳等、球磨郡の古代を語るに欠かせない重要な遺跡が多く存在しています。豊かな自然と懐かしい風景が良好に残っており、訪れる人々を魅了しています。また来訪者を暖かくお迎えするホスピタリティーと楽しいことが大好きというバイタリティーは、この地の住民に伝統的に培われた性分と言って良いと思います。時間、歴史、空間、景観、人間それぞれ豊かに満たされております、そういうところで暮らす幸せを、本日あらためて再認識したいと思います。

奇しくも、あさぎり町の「町の花」でありますリュウキンカの花言葉は、「必ず来る幸福」でございます。また、現役の駅として唯一「幸福」と名のつくおかどめ幸福駅があります。その近くには、幸福神社として親しまれている岡留神社があり、幸せを呼ぶ神社として多くの人々が訪れております。まさに球磨の幸せ小宇宙という、シンポジウムのキャッチフレーズによる町だと思っております。この豊かな恵まれた資産をどのように一体化させ、未来に繋げていくのか、我々の知恵と覚悟が問われていると思っております。

本シンポジウムが、今後のあさぎり町の進んでいく道を照らすものとして、官民一体となって、日本一幸せな町、あさぎり町を目指していきたいと考えております。どうか本日は最後までどうぞよろしくお願いします。

〇沖松主幹

ありがとうございました。

註１：国指定重要文化財「肥後国球磨郡免田才園古墳出土品」のうち「鎏金獣帯鏡」を指す。

２．第１部　記念講演

（１）文化遺産とまちづくり

講演者：西村幸夫（東京大学先端科学技術研究センター所長）

○沖松主幹

東京大学先端科学技術研究センター所長の西村幸夫先生に御講演いただきます。シンポジウムパンフレットの４ページの中程を御覧いただきたいと思います。

○西村幸夫氏（以下　西村氏）

はじめに

よろしくお願いします。先ほどのフォトコンテスト、提案ですが、せっかく良い写真が集まったので、受賞作品を色んなところに飾っていただいたり、公共施設を含め、色んな場で使っていただけると良いなと思っております。それからエイサーですね。若いちっちゃい子ども達も、一生懸命活動している姿は本当にほほえましいですよね。

さて、私は歴史的な環境を守り、それを生かしてまちづくりに使っていくというようなことを仕事としてきました。今回、あさぎり町には初めて来ました。人吉までは来たことがあって、その時のイメージでは球磨川が大きな川で、川下りをするすごい川という印象と、古い相良 700 年の歴史、城下町の印象をもっておりました。今回も来るのを楽しみにしておりました。今日の朝、本当に駆け足で少し２時間半ほど見せていただきましたが、色々なものが初めてであり、第一印象もありますので、本日の本題に入る前に少し、そのことについてお話ししたいと思います。

あさぎり町の印象 ～もう一つのまほろば～

何箇所も色々見させていただきましたが、これは山上八幡宮の少し小高い丘のところから撮った写真です。来る前までは、球磨川の上流ですので、盆地というのはもちろん分かっていましたが、もう少しすごい山が迫っている盆地なのかなという印象でした。しかし実際は、実に広々とした感じです。河岸段丘が何段かありますので、その手前に斜面の緑があって、そしてその奥にまた少し高いところに田んぼがあって、そして山があるという。非常に奥行きがあって、広い谷だという印象を受けました。それが、それまでに思っていた印象とかなり違っていました。そして、奥の山もそんなに険しい山ではなく、非常に穏やかな山で、その意味である種、古代的な空気があると感じました。

これは同じ山上八幡宮の角にあるタブの木です。この辺の生態植生の極相の特徴というのは、こういう昔からのタブの木があったというのが１番古い樹相だと思います。それから、このようなやはり古い神社とかにあるので、これが故郷の、この木の原型なのかと思いました。照葉樹林帯の大きな特徴です。そして、何箇所か行く間に、やはり先ほど言いましたよ

うに、手前側にすごく低いなだらかな丘陵があって、それが何層にも重なっていっていると。これは、私はすごく奈良の盆地の風景に似ており、特に斑鳩だと思いました。これから講演される中川先生は、奈良県の明日香村だと言われました。私も確かにそうだと思いますが、このようなところで何か少し斑鳩と法隆寺のような雰囲気があると思います。ただ法隆寺の周りは、実は住宅が建て込んでいます。建物が目の前にもあり、周りにもあり、こんなにきれいではないです。法隆寺を少し綺麗にした、何も変なものは無くしたような、つまり何十年前か前の法隆寺という感じです。だから、これは古い「まほろば」だと思いました。

先ほど言ったように、このような段々があって、斜面緑地があり、その中に本目遺跡がありますが、やはりそのような風景の中にあるなと感じます。そして山の方に行くと、だんだん山が迫っているという訳です。要するに谷が少しありますが、大きな川は球磨川以外にないので、少しずつ間隔が狭くなっていって、そして、山裾にお寺や神社がある。これは面白い事実だと思いませんか。それに、本当に斑鳩のようです。

だから、広い盆地で重なる段丘があって、穏やかな山があって、急流域で轟々と流れている凄い川というよりは、非常に優しい人の生活に非常に近い川だと思います。魚がたくさんいて、よりきれいで、そこで子ども達も遊べるような、そんな本当に優しい球磨川、これが第一印象でした。そこに加えるとすれば、あまり変なものがないということです。変なショッピングセンターがドーンとあったり、工場がドーンとあったりとか、そういうものがないので、先ほどの写真のように、実に見事な盆地が広がっています。だから、私は「もう一つのまほろば」だと言えると思います。またさらにクマソの伝承があって、今日の後のお話にもあるような、非常に深い歴史、そのようなものが財産として重なっています。そのようなところが、まさに「まほろば」と呼ぶにふさわしい地形をもっており、それを実感することができます。これは奈良盆地と同じです。広い盆地があって、段丘はあまり感じられませんが、山も穏やかで、向こうは大和川ですが、同じような状況があって、古代に栄えたということが言えるかと思います。

生きる産業遺産、水路

山へ次第に入っていくと、実は徐々にその変化があり、それが実感として感じられ、そしてその間にあまり変なものがありません。しかし、そのことは課題も抱えており、一番大きな課題は、大きな川が１本しかなくて、支流は全部小さな川であるため、水を取るのが難しいという点です。特に段丘になっているので、どうやって水をとるかは、このような地形が一番難しいと言えます。例えば瀬戸内海の周りがそのような地形です。大きな川はあまりなく、そして少し小高いところに集落があるため、水が非常に難しい。そのため、そのようなところではどのようなことが起きるかというと、ため池を作って灌漑用水を作るのですが、ここはため池はあまり見られず、昔からの灌漑用水があります。それが百太郎溝です。同じ百太

百太郎溝

郎溝でも場所によって随分違いがあり、しかし、とうとうと流れているというのはすばらしい。これは幸野溝です。一段上流の、ある意味山の端のエッジを流れています。

つまり、このような地形の中で、いかに灌漑用の水を取るかということは非常に大きな課題であり、それを解決するために、川に平行して少し上流・上段のところに、このような灌漑用の水路を掘っていくということは、日本の歴史の中で普遍的にみられるものです。それは実によく機能しており、その景色を作っていて、皆さんの生活のなかにちゃんと溶け込んでいて、すばらしい物語をつくっています。そして、今でも機能しているため、これはまさに生きている産業遺産だと言えます。それがおそらく明治以前、江戸時代の初期、さらに古い時代からあるということですので、そのような遺産をずっと引き継いで生きていく、それが溝というところが面白いと思います。

大野川という大分県の川の流域では、「イロ」と言ったりするそうです。井戸の「井」と「路」と書いて、「井路」と言うことが多いのですが、こちらでは「溝」と言います。このような水路は、作られた当時からほとんど変化しません。このような盆地の中に、様々な時代に様々な開発が起き、それらが歴史を作り、古墳時代からというような歴史の層を作っている訳ですが、恐らく一番変わりにくいものの一つがこの水路だと言えます。分かりますように、水には権利があり、そしてこれは灌漑の用水であるため、ここだけで止めるということはなく、非常に広い範囲のなかで管理され、権利で守られている水源です。同時に、これはあたり前ですが、水は上から下へしか流れないため、あまり迂回させたり、U ターンさせることができません。サイフォンで汲み上げて川を渡すというような、すばらしい技術はありますが、下流から上流に流すことはできません。そうすると、1 回作ると、なかなか別の所に U ターンさせたり、バイパスすることはなかなかできないという訳です。そのため、ある勾配で流さないといけないということと、それからこの水に権利があり、それが機能として生きているという、何重にも水は管理されているため、変わらないということを御理解いただけると思います。

やはり、このような水あたりが難しいところでいかに耕地を増やしていくかということは、これは江戸時代を通じて、日本中で大変な努力が続けられていた訳です。そのため、日本中にこうした重要な用水というのがあるのですが、他にも負けないものです。しかし、これはあさぎり町だけではなくて、ある意味、盆地全体で機能しているため、様々な多くの課題を、町だけではなく、盆地全体でいろいろな物事を考えないといけないということが言えます。それにしても、長い間、すごい努力と維持管理で守られてきたものが、当たり前のように今流れている、これは非常に重要な遺産だと思います。

先ほど言いましたように、このような地形であったため、これが必要であったのであり、別の形、例えば大きな支流が 1 本や 2 本入っていて、そこから水を取れれば、もう少し簡単な用水路ができたはずです。そのため、この球磨川と盆地のもつ地形的な特色がこのようなものを生み出したと言え、非常な個性を現しています。また、この湾曲はおそらく地形の等高線を表していると思いますので、それらが地形としての、この地域の目鼻立ちを決めている訳ですが、そのようなところに長い歴史のなかで、その時代単位に色々なものが成立していて、それが今も残されているということです。もちろん古墳時代のものもありますが、そ

れは後ほどのお話のなかでたくさん出るかと思います。

物語を想像できる地域

阿蘇神社鳥居

例えば、これは平等寺跡と地元で呼ばれているところですが、ここにはもう伽藍も無くなってしまっていますが、この鳥居があるだけで、ここに様々なものがあったのだろうということを想像できるかと思います。そうすると、もちろんここに参道もあったのでしょう。その後、耕地整理により参道も無くなってしまっていますが、ここに鳥居が残ることにより、我々のイマジネーションが広がります。ここにあったのだと、想像しながらそれを見ることができます。つまり、物語を感じることができれば、今は無くなってしまっていても、ここでそういうものがあったのだと想像する手がかりがたくさんあると言えます。しかし、ここに道がありますが、変なものが建ってしまうとどうでしょうか。例えば、コンビニがバンと建ってしまう等。コンビニも必要ですが、ここになくてもいいですよね。このようなもの、つまりあまり変なものがない。何も無いということではなく、変なものがない。このようなことは、物語を、イマジネーションを豊かに感じさせてくれるために、すごく大事なものだと言えます。

そして、お堂があります。これは宮原観音堂です。本当に綺麗だと思いませんか。ちょうど今、彼岸花が咲いていますが、彼岸花はすごくセンチメンタルな花です。なぜかというと、ある時彼岸花について調べることがあり、それで分かったのですが、彼岸花の「実」って見たことがありますか。普通はなかなか実がなりません。実は、彼岸花は染色体が三倍体であるため、なかなか実がなりにくい形をしています。ではなぜ、日本中で彼岸花が見られるかというと、そのような三倍体をもった種無しブドウ的な彼岸花が、何かに付いて中国から渡り、日本に入ってきたそうです。しかし、その種がないため、普通はなかなか広がらないはずです。誰かの手によって株分けが行われない限り、なかなか広がらないため、恐らく誰かの手が入っていると考えられます。その証拠に、山の中の原野みたいなところに彼岸花はありません。皆さん、考えてみてください。この花が山の中、誰も行かないようなところにポツンと仮に咲いているということは、まずないと思いませんか。田んぼの畦道等に咲いています。何故かというと、ずっと昔のことかもしれませんが、誰か株分けしてくれた人がいたのではないでしょうか。そのような目でみると、この花が色々な人の手を経ながら、こういった大事なところに植えられている。おそらく九州のどこかから、ここまで来たかと思います。そのように、手から手に引き継がれながらここまで来た物語みたいなものを感じながら見ると、何かもっと大事な花のように見えてきます。つまりこれは、この花がもっている物語をとおしてこの風景を見るということです。そのような物語は、この地域で探すとたくさんあります。その物語はあまり探す必要はなく、自然にその物語の中に入っていくことができます。そこがすごく印象的でした。

もう一つ驚いたことが、これが麓馬場通りですが、住宅の道路の抜け道にこんなにすごい冠木門があるということです。まず世の中ないと思います。このような道路構造物はダメだと言われるでしょう。また、これに応じた武家屋敷群があって、これは中世の集落です。それがいまだに残っており、お話を伺うと、そのころから代々住んでいらっしゃるという人達がいるとお聞きしました。それってすごいと思いませんか。そもそも中世の時代から同じ武家がずっと居続ける所は、日本中で本当に少ないです。そのため、この辺だと、島津家と相良家が古くからありますけど、他の地域ではそもそも戦って敗れたり、色々なところで配置換えがあったことで、その人達はどこかへ行ってしまいます。新しい武士が入って来て新しい統治を繰り返していくため、普通は残っておらず、そもそも中世にこのような都市的なところは日本には非常に少ないです。そのため、このようなものがそもそも残っているところにおそらく文書等、代々受け継がれる様々なものがあるのだと思います。建物は建て替わっていると思いますが、それに沿って古い時代の建物を受け継いだような建物がまだ残っており、人がいて記憶があって、文書や様々な物が残っている。そのことにより歴史を感じさせてくれる。しかし、このような武家屋敷のスタイルというのは、その後ほとんど見られません。日本でも非常に珍しい、そのような日本の中世の都市の姿を見ることができるため、これはすぐにでも伝統的建造物として調査をしていただければ、すごく光が当たると思います。また、そのようなことに関わらず、大事にしていければと思います。

麓馬場通り・冠木門

これを見てください。駅にしめ縄がはってあります。ほとんど日本には無いのではないかと思います。駅のプラットホームからこのような景色を見ることができるというのは、なかなか無いでしょう。日本ではここ以外になさそうですので、何か色々な人の物語、幸福駅という名前ももちろんありますが、もっと色々なここの活用法を、ここがすごいという物語を作れそうな気もしています。

年縞が降り積もる盆地

もう一つ考えたのは、これは年縞（ねんこう）といいます。「年縞が降り積もる盆地」です。年縞というのは何かというと、環境考古学の用語ですが、日本で有名なのはこの湖です。この湖は福井県の若狭にある三方五湖、水月湖。いい名前です。水月湖といいますが、ここは年縞で世界的に有名です。これはどういうものかというと、この湖は山側にはまた別の湖、三方湖というものがあり、海側にはまた別の湖があって、ここの湖底というのは土砂で荒らされることがありません。洪水が来たとしても、周りの湖で全部土砂が止まり、海が荒れても別のところで止まってしまいます。ここは、ほとんど波もない環境でその後何万年も続いたところです。徐々にいろんなヘドロが溜まってくるため、一枚ずつ年輪みたいにヘドロが溜まっていきます。その時にどこかの火山が爆発すると、その頃の環境がどうだったのかがヘドロで分かります。こうして溜まったヘドロのようなものを年縞という訳です。

なんとここには、15 万年分の年縞があります。それはボーリングの技術のおかげでもあり、その中の 7 万年分が今世界標準になっています。つまり世界の環境がどうだったかという時に、その時の環境を表すのは、ここの年縞が世界理科年表として載っており、これで測れるようになっています。本当は 7 万年以上あるため、より調査が必要です。このような特殊な地形をしているところは世界に 2 カ所ぐらいですが、知らないとただの湖です。綺麗ですよ、名勝にもなっています。ここは海と繋がっていて、外海と繋がってはいますが、この球磨川の盆地というのはある意味この水月湖と似ているのではないかと思います。あまり変に荒らされていない。新しいものが入ってくると、少しずつもちろん変化はありますが、新しいものは、古いものを全部排除していません。上に降り積もるようにずっと下がってきて残るため、古い色々なものが読めるようになっています。歴史のトレーサビリティ（追跡可能性）です。トレーサビリティとは「どこから来ているのか」という意味です。あさぎりの水だったら、あさぎりの川だと分かりますが、普通の水だとどこから来たのか分からず、あまり安全だとは思わないでしょう。しかし、歴史のさまざまな環境が分かり、そのようなところに自分達の生活の基盤があると思います。それだけの多様な物語をこの球磨の地域はもっています。

若狭と平泉の事例

こういう水月湖のような地域は、日本では実は幾つかあります。あまり変化が無くて、静かな場所。一つは若狭であり、やはり開発がされていません。これが聖なる山で、これが若狭神宮寺というお寺です。ここも少し共通するものがあり、お寺にしめ縄があります。駅にしめ縄があるのは珍しいですが、お寺にしめ縄があるということは神仏習合そのものです。普通これはなくなっていますが、ここでは未だに仏像と神像が一緒に並んでいます。何か時代遅れというか、時代に取り残されてしまっている。時代と関係なく、このなかでは生き残ることができ、その正面にこの山があります。このような意味で、この山には何か意味があるのではないかと感じられます。

これは今から 27、8 年ぐらい前の写真ですが鯖街道です。1983、4 年頃に調査を行った時はボロボロでしたが、今は綺麗になっています。町も今から 27、8 年前はお客さんが増えることはありませんでした。

我々が調査をした時は、ここにお店ができるとはとても思えませんでした。こういう静かな、それこそ信仰があるような所でしたが、これが元気になってきました。

そしてもう一つは、少し私も関係した岩手県の平泉ですが、残念ながら世界遺産になる際もここは、あまり関係ないと外されたままです。気の毒なところですが、「骨寺村荘園遺跡」という場所があり、このような盆地です。ここは小さな町ですが、実はこの盆地は景色としてはこのぐらいしかありません。なかなかいい景色ですが、どこにでもあると言われればあります。

何故ここがすごいかというと、実はこの地域はそっくりそのまま中尊寺に寄進されてしまい、中尊寺の寺領になってしまいました。そのため、ここの米の管理を中尊寺がしていたということがあり、地図が作られて、その地図が今でもまだ残っています。これがその地図

でして、確かこれが 12 世紀前半です。少し分かりにくいですが、周りに山があり、ここに川があります。また、1 本道があり、道沿いにポツポツポツポツと農家があります。そして、ちょっとした山があり、ここにお堂が描かれていますが、今でもあるということが分かります。これが指定された範囲です。この絵図が発見されたため、この地域のこの風景が、実は 12 世紀の後半からほとんど変わっていないということが証明されました。

この発見された絵図は、現在重要文化財になっており、この風景そのものは、重要文化的景観になっています。この景観だけを見ると、どこにもある景観なのかなと思ってしまいますが、この絵図があるおかげで、ここが本当に古い 800 年ぐらい前の集落のままであり、この風景が物語になっていることが分かります。変わらないということが、実は農家の人を元気付けています。実は田んぼが小さいため、大きく土地整理をしようという話でしたが、世界遺産になる可能性があるため土地整理はやめてくださいとお願いをして、結局中断していただきましたが、その後、実は世界遺産にはなりませんでした。それは残念なことではありますが、ここにいる人達は、自分達の住んでいる場所が非常に重要な風景だと分かったことから、元気になり、色々な形で活動も進んでおり、またここにこういう風景を見に来る人達もいます。

同じようなことが、このあさぎりでもやれるはずです。そのために、ここにストーリーがあり、そのストーリーにきちんと自信をもち、それをここに住んでいる皆様方がまず思えないと、そうはなりません。分かっていないと、誰も外からは信じないと思います。

実は、平泉は昔の都市があった場所です。それが全部滅んでしまい、その後新しく都市ができています。そこにある都市と、かつての都市はまったく関係ありません。そういうところですので、風景的にもそれなりの風景がありますが、大事なところに電柱があるというような問題がたくさんあります。そのため現在、ふさわしい風景にしようと考えられており、これが 12 世紀に平泉があった頃の想像図です。三代に渡って都市ができていますが、おそらく麓馬場通りの風景もこのようなものではないかと思います。この図を説明すると、ここに政庁、ここにお寺があり、それを繋ぐ道があって、その道沿いに続いている、これが政治の中心だったのだろうと思います。そのため、このようにずっと続いている道がありました。おまつりがある際は、ここは聖なる山であり、この向きに同じような道ができて、お寺があり、三代目のときに、ここにお寺が聖なる山に向かってでき、そしてこちら側に聖地を分けるというように。それぞれ聖なる山があり、麓が政治の中心で、麓に山といった情景ができて、お寺ができ、三代に渡り積み重ねられていた。そのようにして、平泉の町ができたということです。世界遺産にはここが部分的になっていますが、その理屈は、それまで都市というのは京都や奈良のように、土地の区画化であり、中国のコピーでした。しかし、そうではない、全く違う都市が作られました。日本は山あり谷ありのため、広い中国のように、平原みたいな都市を区画にして規格的につくるのはなかなかできないため、地形にあわせて

麓馬場通り

作られました。なおかつ、地形のもとになるのが信仰であり、この場合は浄土真宗であったという物語です。

また、ここには「無量光院」という場所がありますが、全て源頼朝に焼き尽くされてしまったため、ここにあるのは遺跡だけであり、その後は農地に変えられていました。しかし、中世の時代、ここには池がありました。現在発掘をしているので、この池の存在は確実です。これは中の島であり、少し高い場所には、この辺りにお寺があったということがわかる建築部材がありました。このような平等院鳳凰堂のようなお寺があったということが分かります。お寺は全て無くなってしまっていますが、この地域に住んでいる人達やその後に来た人達も、この場所にこのようなものがあったという伝承は受け継いでいるので、あえて別のものを建ててはいません。そのためずっと田んぼのままにしていた。それどころか、中の島に大きな木が生えていますが、その木も切られていません。この木は農家にとっては日陰を作るだけであり、必要のない木だと言えます。お米の収量は上がらないですが、切られませんでした。つまり、この場所を大事にする気持ちがあったのだろうと思います。そのように思っていないと、この場所は田んぼになってしまっており、この風景の物語や価値等は分からなくなってしまっていたでしょう。

さらに、この場所には金鶏山という山がありますが、この手前に建っていることが大事です。しかし、平泉を世界遺産にしようとしている時に、この山のことは誰も気付きませんでした。議論していくと徐々に、「後ろに山がある」、「おそらくそれは須弥山、聖なる山じゃないか」という意見が出てきました。そして、実際に発掘すると、経筒等が多量に出てきたため、やはり意味があったのだと証明され、現在、この山の大部分が世界遺産の構成遺産になっています。そのような目でみると、なるほどそうかと思いませんか。このことは、やはりあさぎり町も同じであり、本当に静かな盆地で、そこに色んなものが重なってきて、それはこのような物語で、それをこういう風に見たらどう見えるのだと、考えることができます。

これからのまちづくり

そのように考えると、変なものはあまり建ててはいけない。この場所は、そのようなものを建てる場所ではないと思いませんか。そうするとやはり、現代の必要なものは作りますが、そのまま別の場所に作ることで、うまく共存ができる、つまり新しい年縞をうまく作ることができます。そして、そのような場所は日本にはあまりありません。しかし、平泉とかと同じように、ここは一つの「大きな小宇宙」であり、そのストーリーは、「もう一つのまほろば」ではないかと、そのような考えで今後まちづくりを行っていくことで、次の新しい年縞を重ねることができ、その新しい年縞というのは、古い年縞を否定するのではなく、それらをうまく活かして、共存できるものだと思います。そういうことを是非行っていっていただきたい。それは何故かというと、なくなってしまった後に気づくことが多いためです。こんなことをやらな

きゃ良かったと思うことが多いのですが、あさぎり町はそのようなことは少ないため、まだまだ可能性があるということです。これまで大きく工場誘致をして来なかったため、それが結構プラスになっているのです。そのような意味では、工業地帯としては取り残されていると感じるかもしれないですが、そうではない。環境としてみると、これほどのすばらしい環境はありません。そのような場所にこそ新しい可能性もあり、人が来てくれる、人が魅力を知って来てくれる場所なのだと言えます。そのようなものは是非見直しましょう。それにしても、これは人吉・球磨盆地全体に言えることですので、あさぎり町だけ頑張っても繋がりません。難しい訳ではありませんが、盆地の問題として考えるということが、一つの課題とされています。以上をもちまして、私の話はここまでにしたいと思います。どうも御清聴ありがとうございました。

○沖松主幹

ありがとうございました。西村先生には、あさぎり町の文化遺産というテーマで、本当に深い話をしていただきました。特に盆地の世界遺産について例示しながら、あさぎり町を含めた地域の可能性ということで、ご提言いただき、本当にありがとうございました。今一度、西村先生に大きな拍手をお願いします。西村先生はこの後、第3部のパネルディスカッションでもパネラーとしてご登壇いただき、また、今回の記念講演の補足等をしていただくことになっております。

（２）あさぎり町の魅力と課題

講演者：中川幾郎（帝塚山大学名誉教授）

○沖松主幹

続きまして、記念講演の２人目は帝塚山大学の中川幾郎名誉教授でございます。皆様、お手元のパンフレット 5 ページの中程を御覧いただきたいと思いますが、中川先生のプロフィールが載っているかと思います。ご紹介申し上げます。中川先生は 1946 年に大阪府でお生まれになり、同志社大学経済学部を御卒業後、大阪府豊中市役所に入庁され、1996 年に広報課長を最後に退職され、1997 年より、帝塚山大学法政策学部の教授になられ、行政学や地方自治法等を担当されております。また、自治体学会の代表運営委員や日本文化政策学会顧問等も歴任をされております。それでは、中川先生のあさぎり町の魅力と課題についての御講演をいただきたいと思います。皆様大きな拍手でお迎えください。

○中川幾郎氏（以下　中川氏）

はじめに

皆様こんにちは。ただいま西村先生のとても貴重な話を聞かせていただいて、私もいろいろ思うところがありました。「秘密のケンミン SHOW」という番組がありますが、そのなかで大阪と大阪以外の近畿の各府県のバトルがありまして、大阪の人間は奈良県に対して「あんなとこ何もない、大仏さんしかない」。和歌山には「海しかない、何もない」。滋賀県には「琵琶湖以外何もない、しょうもない」というように発言したのですが、それを言われた各府県からの大阪に対抗する言葉が見事でした。「世界遺産がないのは大阪府だけやないか」と。それ以外の近畿府県にはあるのです。大阪のタレントさんは絶句していました。実は、世界遺産のことを一番気にしていたのは大阪府庁でした。世界遺産の国内認定の最高機関であるイコモスの委員長が西村幸夫先生ですので、西村先生と一緒にお酒を飲むことがあれば、「仁徳天皇陵古墳をはじめとする百舌古墳群が世界遺産になるようでならない。一生懸命頑張って努力しているのに、その壁は何かということを教えてくださいませんか」と、言われて、今回やってきましたので、昨日お伺いしてみたところ、いとも簡単なお答えでした。乱開発が進んでいるということと、この古墳群の周りにどうしようもない高い建物があったりしていると。つまり、近代化が一番大きなハードルだというご回答でありました。

「サンマの法則」から見えるあさぎり町の良さ

それらの点から考えますと、このあさぎりは先ほどの話でもありますように、開発が止まっている、いい意味で止まっています。大切にされている歴史があるのだと、私は思います。

今回で、この町を訪れますのは 3 度目ですが、毎回私がお伝えしている、この町の素晴らしい点は、時間軸と空間軸と人間軸、三つの間、これを「サンマの法則」と言いますが、魚

のサンマではありません。三つの間です。その歴史、時間を大事にしているか。それは、われわれの先人が残した歴史遺産を大切にしているかどうかだけでなく、未来の子ども達、子孫に歴史を残そうとしているかということ。それが一つ目です。二つ目は、歴史にも関係すると思いますが、都市の空間、景色を残そうとする意欲があるか。これは自分達の生活空間に美しさという意識をもっているかということです。同じような道路などはたくさんありますが、先ほどの鯖街道の写真を見ても分かるように、努力することで美しさを復活できるのです。そのような努力をしているかということです。三つ目は、その町に住んでいる人がお互いを大事にしているか、そこに住んでいる人が生き生きとしているかということです。すべての観光地に共通する特徴は、その町に住んでいる人が幸せそうだということです。人が不幸せそうなところには人は何度も訪れません。この三つの資産を大事にしていただきたい。また、歴史の素晴らしさで言うと、免田式土器の非常に有名な町だということ。これは考古学の世界の人々にとっては涎が垂れそうなことです。美しい土器であり、その価値も本当に言い表せない。また、観音様やお薬師様のお堂等がいたるところにあり、三十三観音はあさぎり町には７つ、８つあると聞きましたが、このように信仰に厚いことも、非常に良いことです。信仰的な奥行きがある仏教文化があり、非常にレベルが高いものがあると言ってよいと思います。

加えて、日本遺産に認定されている相良氏に関連する文化遺産です。先ほどの麓城の城下の馬場通りについては、西村先生もおっしゃっていましたが、これはすごいと、私も思います。日本にそのようなところはもうほとんど残っていません。それをもっともっと大事にするべきではないかと思います。

また、百太郎溝と幸野溝や、力が漲っている美しい田園風景があります。私は田んぼを見るのが大好きで、初めてあさぎり町に来た時に、田んぼにパワーが溢れている、このような田んぼは久しぶりだなと思い、嬉しかったです。

そして、「おかどめ幸福駅」ですが、駅が非常に面白い。くまがわ鉄道みたいな路線はブームであり、鉄道好きな「鉄ちゃん」にとっては、くまがわ鉄道は一生に一度は乗りたい路線です。この地域の「鉄ちゃん」人口はどれくらいか知りませんが、その人達が１回乗りに来ると、最終的には何十万人にもなります。そういう潜在的な需要がある。また、少し変わったことを言うと、先般、佐古和枝先生に教えていただいたのですが、「夏目友人帳」というアニメの中に、「おかどめ幸福駅」と思われる風景が出てきています。このあさぎりの風景がちゃんと出ています。そういった非常におもしろい町だと言えます。

人間で言うと、郷土愛に満ちた人がたくさんいて、本日エイサーを披露していただいた浦本真道さん、彼らが中心となって頑張ってくれています。地域を愛する若者が登場し始めていることは、非常に嬉しいことです。また、彼らをバックアップする大人達もたくさんいますが、何かにつけて何かあることを面白がる気質を持ち合わせています。写真を見ると一昔前までは、仮装行列のような行事（おどんがまつり）があったようですが、最近は無いのでしょうか。加えて、人々が本当に幸せそうに見えることも私は嬉しいことです。例えば、今回も旅館に泊めていただくと、朝からおかみさんが本当に楽しげににこやかに、ここしばらくあったことの出来事を私達に話してくださいました。その話の中身がまた幸せな話であ

り、このようなことを話題にできる気風も嬉しいことです。

さらに、焼酎が旨い。普通は芋や麦等を用いて焼酎にすると思いますが、ここは米で焼酎を造る。贅沢なことで、旨いのが当たり前、非常に羨ましいことです。「森のくまさん」という、日本一に選ばれたお米があるそうですが、その他のお米だっておいしいです。そして、温泉もあるではありませんか。その温泉に宿が無いというのは、少しもったいないと思いますが、今後の開発の仕方です。

さて、今回の２０周年記念イベントに、佐古先生が「球磨のしあわせ小宇宙」というキャッチフレーズを付けられましたが、本当にその通りです。西村先生は「もう一つのまほろば」と言われました。あさぎりは、次から次へとそういうネーミングが出てくる町、空間だと言えます。

自治体としてのあさぎり町の課題

さて、これからの課題です。あさぎり町は五つの町村が合併していますが、そういう場合、多くの自治体で寄り合い所帯の悪弊が出るものです。縄張り意識のように、「旧〇〇町出身はこうだ」、「文化が違う」といった意見が出てきます。しかし、先ほど町長へお聞きしたら、あさぎり町ではそれがなく、すでに克服しているということで、ほっとしました。

それからもう一つ気になる点は、合併した自治体は、地方交付税という国からもらう交付金について、合併する以前と同じ状態で、合併後 10 年間、さらに次の 5 年間という暫定的に余分にもらえることになっています。大きな自治体になればなるほど、効率が上がるという前提で、その交付税は人口に対して減少していきます。この 10 年と次の 5 年、5 年から 9 割、7 割、5 割、3 割、1 割と落としていき、最後はゼロにする。今が交付税の暫定特例期間ですが、もうそろそろ終わります。そうなった際に、交付税がガクンと減ってしまいます。それに太刀打ちするために内部改革、あるいは財政改革をしていかないと間に合わないのですが、それに対する太刀打ちもしっかり対策しておられると聞き、安心しました。しかし、それだけではなく、これからより一層、小さな自治体としての、弱みではなく強みを活かしていくような動きをとってはどうかと思います。それは職員一人ひとりが何でもできる、また何でもしなくてはならないというように、職員文化を作りあげていくこと、それが小さな村や町の職員の仕事です。

例えば、住民課の職員は、住民基本台帳はもとより、戸籍もわかる、外国人登録もできる、国民健康保険の計画も作る、ということが求められます。ところが大きな自治体になると、同じ住民課であっても住民基本台帳しかわからない、というような職員になってくる訳です。これは困ったことです。できるだけ総合能力をもった一人ひとりの職員の能力開発に切り替える必要が出てくる、ということも申し上げておきたい。それとともに、住民側も、何でもかんでも役所の方にやってほしいと頼るのではなく、財政的には住民と行政の双方がお互いに理解し合って、住民は行政経営者になったつもりで、行政職員は住民になったつもりで、お互いに共存していく場面がたくさん必要になっていきます。すでに、政令都市とか中核市、一般市はおろか、中部地方から西日本一帯にその動きが広がっており、住民意識（団体意識）の強化と経営の効率化をお互いに進めていこうという、一言で言うなら、「住民と

行政がともに手を携える」という路線の自治体に向けて取り組んでいく。そのような時代になっています。

そこで、このあさぎり町の展開を考えていくと、いろいろなプラス面をとりこんでいかなければいけない課題が出てきます。一つは地域同士のつながり、それから団体同士のつながり、集団同士の前に個人同士のつながり、これをもっともっとつなぎ合わせるような文化をコーディネートする、引っ付けていく。そのような文化が必要だと思います。

今回、写真コンテストも非常にご苦労されており、この成果を喜んでいますが、私も元自治体職員でしたので、少し申し上げますと、くまがわ鉄道や旅館の皆さんから、何か特別賞を出していただければ良かったかなと。農協等からも何かお米一俵等いただければ嬉しかったなと、そのようなことを考えた次第です。私が言っている総力戦とは、そういうことです。同じイベントをやるとしても、地元の団体がみんな協力していくようにもっていく方が、町としては面白いと思います。次回からは、それを課題にしてはいかがでしょうか。

文化財によるまちづくり

それと、相良氏関連の文化遺産が日本遺産に認定されていますが、それを単に喜んでいるだけではなくて、武器として使うために、新しい産業としての観光をどのように戦略化するかが重要です。この地域は非常に豊かで恵まれた土地であるためか、このままでいいのではないかと思っている雰囲気もあるかもしれません。しかし、どんなに優れた土地も、このままでいいかと思った瞬間に、衰退が始まります。現在の金沢市、あの武家屋敷の町も、かつてこのままでいいのではないか、というようなことを言っていたら、荒れに荒れてしまいました。今のままでいいとは、何もしないということになってしまいがちですから、守るなら守るで、何かを守るために行動していかなくてはなりません。そのためには、行政・住民の意識転換を、「守るために戦い、開発するために戦う」というように目線をおく必要があります。手法としては、いろいろなものを組み合わせること、これを複合化と言います。そして、新と旧、伝統と先端、これを対比させていく。実は、最初に登場したエイサーが、まさにそうです。地域で大事なことは、コンプレックス（複合化）だけではなく、コントラスト（対比）もありますが、沖縄とまさかこの球磨郡とが繋がっているとは思わないが、実は繋がっており、ここに登場してきたとすると、何か新しい風や波が起こる気がしませんか。沖縄の文化がこの地域でドンドンとされていると、良い意味で何か胸騒ぎがしてくるではありませんか。このようなコントラストを持ち込む取組みで言うと、ビエンナーレ・トリエンナーレというものが各地で実施されています。ある地域では田んぼの真ん中に 100 個近いいろいろな芸術作品が展示されていますが、いま観光客が集まって大盛況です。田んぼの中に前衛美術がボンボンと立っている。これも見事なコントラストだと思います。複合化する、対比するということになるのです。これらの視点を活かした、文化財によるまちづくりを考えないといけません。本

目遺跡を何らかの観光資源にできないだろうか、とかいうことです。あるいは免田式土器を何か商品化できないでしょうか。昔、確かあの土器を模した入れ物のなかに焼酎が入っており、飲ませていただいた記憶があるのですが、ああいったものは本当にいいかもしれませんね。

東京オリンピックに向けた文化事業の展開と世界への発信

もう一つ申し上げたいことがあります。2020 年東京オリンピック・パラリンピックが近づいていますが、この 2020 年の東京オリンピックはスポーツの祭典というだけではなく、文化の祭典でもあるという位置づけに次第に変わってきています。これはロンドンオリンピック以来、継承されていることです。「やりっぱなし、しっぱなし」というのはもう駄目であり、やるとすれば、2～3 年後に財産（レガシー）になっているようにしましょうという流れに変わってきました。そこで文化庁、文部科学省も、選手村の開設期間に全国自治体での文化事業の展開を目指しており、展開件数の目標が 20 万件です。20 万件と言いますが、地方自治体の数は、現在は確か 1750 程度だったかと思います。切り上げて約 2000 です。1750 であれば、一つの自治体あたり 110 件。つまり、このあさぎり町でも 110 件展開しないといけない。しかし 110 件は 1 年では無理であり、前倒しで準備に関する取り組みや、今回のシンポジウムも協力事業という位置付けで含めても、難しいとは思うのですが、やはり何らかのシンボル事業が必要なのです。つまり、財産として残すための事業を考える必要があると思います。そのような意味では、私は先ほどからお話が出ている、世界遺産の場合はヘリテージと言いますが、財産にのっかかるような事業、財産に残すような施策を考える必要があると思います。

次はインバウンドです。外国人訪問観光客数ですが、関西では競争状態に入っています。大阪でも奈良でも京都でもそうですが、本当に外国人観光客が多いです。大阪の環状線に乗っていても、平日でさえ 1 両の車両の中の 3 分の 1 の人の会話は中国語というような状態になっています。また、ヨーロッパ言語圏の人も多くなっています。先般、和歌山県の中辺路を歩いていると、外国人の家族連れが 5 人でリュックサックを担いで山道を熊野古道に向かって歩いていました。あれ？と思って見ていると、その 100 メートルほど後ろに、ヨーロッパ圏の外国人が歩いていました。どうしてそんなに外国人が熊野古道に来るのかと思ったのですが、事情を知っている友人に聞いてみると、「それは、インターネット情報です」と言っていました。現在はフェイスブック等で、こんな面白いところに行っているのだと、同時にバーっと拡散され、その情報を基に外国人用の旅行ガイドブックが編集されなおしていく訳です。これはフェイスブックの発信件数が多いところが、だいたい注目されるようです。つまり、Wi-Fi が設置されている場所で、たくさん全世界に向かって呟かれるということです。実は、この現象が現在の和歌山県で非常に表面化しています。なぜ和歌山なのかというと、日本の古い、さらに自然な形で田舎が残っている、という事情があるのです。私は一瞬、あさぎり町のことを思い出しました。あさぎり町の方が、よほど優れた日本の農村文化が残っています。ここから配信したら良いのではないかと思いましたが、そのように、このあさぎり町から発信できるような Wi-Fi 拠点を作ったらどうか、というようなことも

考えたら良いかもしれないと思います。

観光におけるＸ軸とＹ軸の重要性

観光というのは元々、「国の光を観る」という言葉からきているように、土地の威力と言いますか、権威あるいは威厳というものも見るものです。そのため、上から目線で「遊びに来てあげている」というようなものではなく、すごいですね、いいところですねと、訪れた人が頭を下げるような土地を作ること、すごいなと尊敬される土地を作ることです。つまり、新たな尊敬・発見・学び、そして私も関わることが出来た、自分も変わるよねと、という自己変革につながるような、心の発見、張りになるような、そういった能動軸、これを私は観光のＸ軸と呼んでいます。

二つ目は、Ｘ軸だけではやはり難しいため、休み場所がある、休憩ができる、そして食べ物がおいしい、いい温泉がある、いい宿がある、というように、いわゆる官能の満足です。この受動軸をＹ軸と呼んでいます。このＸ軸とＹ軸が重なりあっていることが優れた観光だと言えます。実は、昔の劣悪な観光地は、Ｙ軸だけでできると思っていました。「これは最後に団体観光で爆発して失敗に終わる」、私が予告してそのとおりになったのが、かつての熱海温泉でした。熱海には本来はＸ軸もあったはずが、Ｙ軸ばかり追求したために、ついに団体観光客からも飽きられていって、そして個人観光客も来なくなった時期があるということです。

こういう視点で見てみると、あさぎり町にはＸ軸の材料が山盛りであり、これをどう繋いでいくかが課題です。これは先ほどの西村先生の言葉を借りると、中に包まれている物語性を表に出すこと、そして、みんなで共有して、みんなが語れるようになることだと言えます。先ほど百太郎溝も見せていただきましたが、百太郎溝という名前の由来については、この３年ではじめて聞かせていただきました。実は、あの溝をつくるために人柱になられた方がおられる。それを皆さんが語り伝えられていけば、その御霊も満たされるであろうし、来た者も頭を垂れると思います。つまり、これがＸ軸の話です。そういったストーリーをみんなが語れるようにしよう、ということです。

そして、Ｙ軸についても、資源の整理をすることで可能性が高くなると言えます。いずれも、開発の努力あるいは繋ぎあわせる努力が必要です。これは、Ｘ軸の価値の見直しと、創造あるいはつなぎ直し、Ｙ軸はどちらかというと、新規開発をしなければならないと思います。

情報発信における課題

考え方として、もう一つ申し上げたいのは、フローをストック化するということ、そしてストックをフロー化するということです。フローというのは、外部との資金の流出入、情報の流出入、人材の流出入のことですが、流れてくることばかりを恐れて意識するよりも、入ってくる、来てもらうことをもっと意識する、出て行くものは仕方ない、しかし来るものはもっと、貪欲にがっちりと捕まえようではないかということです。加えて、外から人が来てくれることを大歓迎しようではないかということです。そして、まさしくこのフローを資産

化するところから生まれる訳で、訪れたお客さんが、「すごいところだよあそこは！」と言えば、その人自身がそういう情報を伝達してくれる訳です。つまり、そういった宣伝的な発想を持ちましょう。今ここにある歴史的ストック、あるいは景観のストック、人的ストックをもっと外部にうまく発信することが大事です。

西村先生に「あさぎり町について、何でもおっしゃってください」と言うと、たった一言、「情報の発信が下手ですね」とおっしゃっていました。情報の発信が下手だというのは、要は上手に人を活かせていない、それから大きな声で言っていない、町の人達がこんなに凄い資産があるということを客体化できておらず、当たり前だと思ってしまっているのです。実は、当たり前の町に住んでいる訳ではなく、私に言わせると、極めて異常な町です。ある意味、異常です。こんなにすごい景色のところに住んでいる国民がどれだけいるでしょうか。こんなに美味しい球磨焼酎が飲めるところはありません。それも、焼酎の造り酒屋さんが5軒もある訳でしょう。全部飲むと死んでしまいそうですが、それは極めて稀有で、ありがたいことであるという自覚をもっていただく必要があります。それをもっと守ろう！売り出そう！という気持ちでいきましょう。

つまり、新たな観光人口の流入を図る戦略と、内部ストックをより複合的に組み立てていくということです。例えば、本目遺跡はあのままでいいのでしょうか。また、あさぎりから出土した鏡金鏡は熊本市の博物館にあるといいますが、そのままでいいのでしょうか、日本に三つしかないものです。想像の世界ですが、『魏志倭人伝』に書かれている卑弥呼が九州の北にあったとするならば、南には魏ではなく呉と結んで対抗しようとした、すごい政治力をもった人がいたかもしれない、そのようなことを想像させる、かなりの存在ではないでしょうか。非常にすごい鏡ですが、この町になくていいのか、それをみせるしっかりした博物館がある方がいいのではないかということも、お考えになられてはいかがでしょうか。私は、そのようなことも必要だと思います。

そして、内部ストックをさらに外に向けて発信するために、外部評価を求めていこうということです。そうすると、文化財保護という観点では教育委員会が一生懸命頑張っておられますが、ここだけに押し付けたのでは駄目です。産業経済、観光振興とも手を結ぶ等、そのような政策の複合化を考える必要があると私は思います。

文化によるまちづくりの総合戦略

そのため、願わくは文化を視点においた、それを強みとするあさぎり町の文化のまちづくりの大戦略、総合戦略を考えていただければ、これから次第に発展すると思います。このことに着目している自治体は結構ありますが、文化のまちづくり条例とか文化基本条例等を作って、改めて観光都市として攻めていこうとしている町があります。その町がどこかと言うと、堺市なのです。

堺市には与謝野晶子、河口慧海、千利休のように、山盛りの文化資産があることに加え、鉄砲鍛冶の伝承もある歴史の豊かなまちです。仁徳天皇陵古墳も堺市です。しかし、それを総合政策にできなかったという反省から、堺市文化条例が近頃できました。現在は、この文化条例に基づく文化基本計画に入っています。それを審査する審議会も、堺市民を中心とは

しますが、外部も入っており、その意見を入れながら、総合戦略づくりに励んでいます。あさぎり町ではそれぐらいのことは可能ですし、外部はもっと発言をするのではないかという気がしてなりません。非常に堅苦しい、社会的なことも言ってしまいましたが、この町には大変大きな可能性があるということを申し上げて、終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

○沖松主幹

「あさぎり町の魅力と課題」というテーマで、あさぎり町の歴史、文化や土地を生かした町づくりという、大変興味深い話を聞かせていただきました。中川先生に今一度、大きな拍手をお願いいたします。中川先生にはこの後、第3部のパネルディスカッションでもご登壇いただきます。

３．第２部　事例報告

（１）本目遺跡と“クマソ復権”

報告者：佐古和枝（関西外国語大学教授）

○沖松主幹

それではさっそく第２部、事例報告にうつらせていただきます。トップバッターは、本目遺跡の発掘調査を指揮された考古学者、佐古和枝先生です。

○佐古和枝氏（以下　佐古氏）

皆さん、こんにちは。20 年前に本目遺跡の発掘調査を担当させていただきました、佐古です。本日は、発掘当初、お世話になった皆様も来てくださり、大変嬉しく思っています。ありがとうございます。

本目遺跡は、大正・昭和初期に、後に「免田式土器」と呼ばれる非常に独特で美しい土器がたくさん出土したことで、学会では古くから名前は知られていました。しかし、古い時代の開墾に伴う出土だったため、本格的な発掘調査は行われておらず、具体的にどのような遺跡だったかということは分かっていませんでした。そこで旧免田町が、免田式土器と才園古墳の鏡金鏡をもとに「クマソ復権」というまちおこしをやろうという動きのなかで、本目遺跡の発掘調査を提案したのが、私の恩師である同志社大学の森浩一先生であり、その関係で私達が発掘調査を担当させていただくことになりました。本来、本目遺跡のような重要な遺跡は、熊本県や熊本大学等、地元の遺跡に詳しい研究者が担当するのが筋だと思います。それが、私達のようなヨソ者がこんなにすごい遺跡を発掘させていただいていいのだろうかと思いましたが、熊本県の文化課に相談をしたら「お前がやれ、助けるから大丈夫だ」とおっしゃってくださり、調査させていただくことになりました。

そういう重要な遺跡を発掘させていただいた責任を感じているとともに、もう一つ、熊本県や九州各地の考古学仲間や先輩方が発掘調査を助けに来てくださって、一緒に掘っていただいたり、御指導いただきました。そして町の皆さんにも、本当にあたたかく迎えていただきました。その御恩返しを少しでもしたいということで、当時発掘に参加した元学生達、今はもう 40 前後の良いお父ちゃんになっていますが、元学生から提案があり、少しでも町のお役に立ちたいということで、2009 年に 15 周年記念イベントを開催させていただきました。そして、去年と今年、20 周年記念イベントをやらせていただきました。今回の開催にあたりまして、大変お世話になりました町の関係者の皆様に、この場をお借りまして、お礼を言いたいと思います。本当にありがとうございました。

私達の専門は、考古学です。そのため、お話できることは、考古学の内容でしかありません。私達は、あさぎり町の遺跡が考古学的にすごく大事だということを皆さんにお伝えするだけでなく、本当はそれをまちづくりのために活かしていただきたいと思っています。しかし、それをどう皆さんにお伝え、説明すればいいのか、私達はまちづくりは専門外だからよ

くわかりません。そういった点を、今日は西村先生と中川先生が、本当に様々な面から文化的なものをまちづくりに活かせるということを教えてくださいました。その先生方のお話をふまえ、本目遺跡や才園古墳等の考古学の遺跡や遺物が、あさぎり町のまちづくりの大事な素材になるということについて、お話させていただきたいと思います。

まずは、球磨郡は、『古事記』『日本書紀』においてクマソと呼ばれた人達の居住地です。『古事記』『日本書紀』では景行天皇、そしてその皇子ヤマトタケル、それから仲哀天皇がクマソを征伐しに来ようとした、という伝承があります。『古事記』『日本書紀』には、各地様々な地域への征服伝承が載っていますが、他の地域はたいてい、将軍が派遣されています。天皇自ら訪れるのはクマソだけです。それぐらい手ごわい相手だったということです。『古事記』『日本書紀』というのは中央政府が編纂した歴史書ですから、「勝てば官軍」というように、「あいつらは悪者だったから征伐した」というように、自分達を正当化するような書き方をします。しかし、考古学は本当にその地域に暮らした人達が残した生活の跡あるいは文化をそのまま伝えてくれます。人間は嘘をつきますが、考古資料は嘘をつきません。

そこで注目されるのが、この免田式土器と呼ばれる、この地域が中心となる独特の土器群です。熊本を中心に南九州に流行しますが、弥生時代の終わりの頃には、球磨郡が中心になっていきます。そして、町の名前がついた土器です。この免田式土器のなかの代表的な土器は、長い頸に尖がったソロバン玉みたいな形の胴部がつく長頸壺で、独特の重弧文という文様がめぐるのが特徴です。昨晩、先生方と夜遅くまで球磨郡の焼酎を飲みながらお話をするなかで、中川先生から「それで免田式土器って、何で重要やねん？ひと言で言え」と言われて、この資料を作り直しました。ひと言では言い切れないので、ふた言言わせてください。

一つは「かっこいい」です。写真のこちらが免田式土器の重弧文長頸壺で、あちらが同じ時代の奈良県で有名な唐古・鍵遺跡の土器と、東海地方の土器です。比べてみると、この免田式土器のシャープさがよくわかりますよね。また、この時期はだいたい土器作りは手抜きになり、作りが雑になっていきます。しかし、免田式土器の重弧文長頸壺は本当に丁寧に綺麗に磨き上げて作られています。非常に洗練された土器であり、弥生土器のなかで最も気品があると言う研究者もいるぐらいです。

それからもう一つは、この分布図ですが、この黒丸が免田式土器の重弧文長頸壺です。中心は熊本の方ですが、沖縄まで含めて、ほぼ九州全域に広がっています。運ばれている土器です。これほど広く行き渡っている土器は他にありません。どうして沖縄まで行っているのでしょうか。なぜ、こんなところまで運ばれたかというと、弥生時代の北部九州の人達は沖縄周辺で取れる貝、ゴホウラガイやイモガイで作った腕輪を非常に好んでいました。それを中継貿易しているのが南九州の人達だったと考えられています。免田式土器を使う人達は、そういうダイナミックな活動をする、パワフルな人達であったということです。

次に才園古墳です。全国で弥生時代から古墳時代を含めて、約 3,000 枚から 4,000 枚ぐらい鏡が出ていると思いますが、その中でも金メッキの鏡は 3 枚しか出ていません。本場の中国でも珍しい鏡が、才園古墳で出土したことは有名ですが、実は鏡だけではなく、ここから出てきた馬具も金メッキされています。一つの古墳で 8 セットもの馬具が副葬されていたというのは、全国的にも最多級です。ですから、才園古墳の副葬品は、全体として豪華であ

り、その被葬者は、熊本県の中でもかなりの有力者だったのではないかと考えられます。

これらのことから、「球磨郡はすごい！『古事記』『日本書紀』のクマソのイメージを考古学から塗り替えよう」ということを、森浩一先生が提唱され、クマソ復権というまちおこしを行うことになったのです。そのあたりの話は資料に書いていますので、どうぞ御覧ください。

本目遺跡の発掘調査では墓地がみつかりました。墓地のなかでも、有力者達の墓とされる、土を盛ってつくった墳丘墓や、破鏡・ガラス玉という、南九州では珍しい出土品もありました。さらに、その墳丘墓の隣からは、古墳時代の南九州独特のユニークな地下式の石室も見つかりました。記紀で「クマソ」と呼ばれたのは、おそらく古墳時代の当地の人達です。そうすると、本目遺跡では、クマソの前段階の免田式土器の時代から「クマソ」と呼ばれた人達までの流れが追えると考えられます。そして、気品のある免田式土器は、『古事記』『日本書紀』に描かれている「野蛮なクマソ」のイメージとは全然違うものであり、それが中央でつくられた話であることを示していると言えるのではないでしょうか。

この発掘調査は、町の単費による学術調査でした。そのため、成果をできるだけ町の皆さんに還元すべきだと思い、現場に立て看板を作って調査の様子を解説したり、発掘現場はいつでも見学可能というかたちで臨みました。子ども達を対象にした説明会をしました。毎日のように、学校帰りに発掘現場に立ち寄ってくれる子ども達もいました。この写真の真ん中に写っているのは、さっきエイサーを踊っていた浦本真道くんです。また、夏祭りに出させていただいたり、町議会議員さん達とソフトボールの練習試合をしたり、いろんなかたちで迎えていただき、私達はこの町が第二の故郷だと思うようになりました。

本目遺跡や才園古墳、球磨郡はもとより、九州のなかでも重要な文化財といえると思います。こういったものもこれからのまちづくりの中に活かしていただきたいと思います。そして、さきほどの西村先生、中川先生の御指摘のように、日本全国にあさぎり町を発信できるような、素敵なまちづくりのストーリーを作っていくなかで、私達にもそのお手伝いをさせていただければ大変嬉しいことです。以上で、私の報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

○沖松主幹

ありがとうございました。

（２）身近な景観が歴史と現在をつなぐ

講演者：河森一浩（宮津市教育委員会）

○沖松主幹

続きましては、京都府宮津市からお越しの、本目遺跡発掘調査の当初から関わっておられ、現在は宮津市教育委員会に勤務されております、河森一浩様に御報告いただきます。

○河森一浩氏

河森です。実は、才園古墳のある岡留周辺地区と、本目遺跡のある下乙地区をつなぐ遺跡ウォークを昨日開催しまして、約 30 名の方にお越しいただきました。私達が本目遺跡を発掘していた頃は、遺跡と宿舎の往復で、実はあんまり町内を見てはいませんでした。昨年度、中川先生がお越しになった時に、この岡留周辺は奈良県の明日香村みたいだということをおっしゃられています。そうかなと思いましたが、今回の歴史ウォークを行うにあたり、色々と下見をいたしました。

この写真はウォークの状況ですが、何気ない道ですが、地形に沿って緩やかに曲がっています。なかなか伝わらないかもしれませんが、凄く雰囲気のある道が続いています。これを紹介する中で、どういうことかということを色々考えていたのですが、特に岡留周辺がそうだと言えます。水田部分は近年圃場整備がされており、直線の直行するような形で土地が整備されていて、そこに道路が引かれています。しかし、その中で色々目を凝らしていくと、何か古そうな道路の跡が残っていて、どうもこれに沿ったかたちで、先ほど説明した、カーブを描きながら続く道があります。そして、この一番上に岡留公園というのがあり、その下に平城（ひらじょう）と呼ばれる、中世のお城だった場所ではないかということが言われている場所があるのですが、そこを中心として、その南側に少し古そうな、もしかすると中世まで遡るかもしれない道、区画がみられます。

さらに、今回歩く中で、やたらと祠が多いと感じました。観音堂や阿弥陀堂等がありますが、その場所をプロットしていくと、まさにこの古い道路沿いの、交差点ごとにそうした祠がありました。いつぐらいに建てられたかというのは、なかなか難しいですが、そのような視点で見ていくと、もしかすると中世まで遡るような街割りが残っていて、そのポイントポイントに、祠が作られている、というようなことが浮かび上がってきます。さらに一番南には、江戸時代のものかと思われる旧道が走っています。その旧道沿いに免田茶屋跡・庄屋屋敷跡という地名が残っています。免田茶屋跡については、相良のお殿様が市房の方に行く時に必ず立ち寄ったという話が地元で残っているということです。また、この古い道のど真ん中の大師堂から四方というところを通って、真っ直ぐ南に伸びる道と、この南の旧道が重なるところに高札場という場所があります。高札場というのは江戸時代に、法律が変わった時や、裁判の結果が出た時に、それらを貼り出す掲示板です。掲示板ですので、一番たくさん

の人に見てもらえないといけないことから、そういった交通の要衝や一番人が行き来するところに立つということを考えると、この道の形は中世から江戸時代にかけての歴史的な流れをすごく良く残しているのではないか、ということを今回歩きながらすごく感じました。

中川先生が、この辺りを奈良の飛鳥みたいだということをおっしゃっていましたが、よくよくこのような形で改めて歴史を見直して読み解いていくと、この道の形や町のあり方というのは、この地理学的な歴史をどうも反映している、ということが分かります。やはりただ歩くだけだと、何でもない道かもしれませんが、こうやって検討していくと、少し面白さが増すと思います。

ここから私が一番お伝えしたい話ですが、近頃、何気ない風景をもう一度見直して大事にしましょう、ということを目的とする、「文化的景観」という文化財の制度ができてきました。実は私が現在勤めている、京都の宮津市もこの取り組みをしており、昨年度、天橋立とその周辺を国の重要文化的景観として選定いただきました。そのなかで、今までは天橋立しかあまり注目されていませんでしたが、天橋立に向けて内湾があるところに、集落が展開しており、「溝尻の舟屋跡」という場所があります。近くに有名な「伊根の舟屋」という場所がありますが、より素朴な雰囲気の舟屋です。ここを調査しに行くと、ほとんど倉庫みたいな建物でした。建物としてはあまり立派なものではありませんが、この地域における阿蘇海を舞台に漁業を営んでいた人達の生活がにじみ出ているような風景が残っています。今までは、あまり地元の人達も何とも思わず、それほど外からの目線も知られていませんでしたが、ここが重要文化的景観ということで少し注目されてくると、やはり地元の人達も意識が変わってきました。実は、あさぎり町に来る前日も、夜の 10 時くらいまで地元の方との会議があり、地元の 30 代から 40 歳ぐらいの人達を中心として、この舟屋をこれからどうしようかという話をしてきました。結論から言うと、「舟屋で酒を飲む」という話になりましたが。無数の空き家もあり、村全体が非常に高齢者してしまっているため、これをどうやって維持していくかについて、若い人達が自分達で考えようと非常に前向きです。つまり、まさに地域の資源をもう一度見直していくなかで、そのようなことが生まれるのではないかということを、私自身も仕事のなかで実感させていただいています。

そのような視点で見ていくと、本目遺跡のある下乙地区は、周りに田んぼがざっと広がっていて、こちらの方に屋敷があって、その周りが林になっています。これが百太郎溝で、屋敷が並んでいることから、おそらく百太郎が作られた江戸時代以降、その付近に家が構えられて、おそらく周囲は屋敷林なのだと思います。昨日少し見せていただいた時に、すごく良いと思って私も見ていました。十文字先生は、「何気ない風景だが、撮り方に工夫とアイディアがあって面白い」というような御講評をされていましたが、また少し違う見方をすると、この風景は何気ない風景ですが、実はその中に歴史や、この地域の営みというものが刻み込まれています。今回の岡留周辺の遺跡ウォークのようなイベントを通して、この風景を読み込んでいくと、そこにまた違った深みが見つけられる、そのようなことを、今回、遺跡を見学するなかで、ただただ考えていました。

さて、フォトコンテストの第１次募集は終了しているということですが、本日から２月２日まで、秋・冬をテーマにした第２次募集が始まるということですが、ぜひその中で、今日お話させていただいたように、身近にあるが少し考えてみると奥深い、面白いという、写真を撮るなかで、十文字先生が言われたように、光に注意するということと別に、自分達の身近な風景を見直していただき、そのすばらしさを改めて考え直す機会になると良いかと思います。以上をもちまして、私の話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

○沖松主幹

ありがとうございました。

（２）遺跡、ワークショップと芸術活動～あさぎり町の事例～

報告者：犬童賢二（あさぎり町文化協会）

○沖松主幹

続いての報告は、地元あさぎり町の犬童賢二先生です。犬童先生は、現在はあさぎり町の文化協会に所属して御活躍でおられます。犬童先生には、「遺跡、ワークショップと芸術活動～あさぎり町の事例～」という内容で、事例報告をしていただきます。それでは、犬童先生よろしくお願いいたします。大きな拍手でお迎えください。

○犬童賢二氏（以下　犬童氏）

紹介いただいた犬童ですが、これまでの内容を写真にしておきましたので、その写真で説明させていただきます。

これは私が昔畑のなかで見つけてきた免田式土器の破片です。このような破片は色々な場所で、あさぎり町では出土しますが、本目遺跡で出土したもの等は全部破片を修復したり、様々なところで大事に保管されていました。しかし、私はこの土器の破片をもっと違った方面で活用していただきたいと思います。土器の破片といったものは小学校等に展示されますが、それらは子ども達が手を触れないよう、ただ飾って、「これが免田式土器です」、というように展示されています。しかし、この展示品は子ども達が壊してもいいじゃないかと、この土器はどんなものかと触ってみる、そういう活動をしていただきたいです。そして、その展示をする場所を、もう一度考えてほしいと思います。そのような場所がなければ、これから未来を考えていく子ども達は、色々なことを創造できなくなっていってしまいます。

土器についてどんなものかと考えてみた後は、その土器を今度は手にとって、鉛筆でちょこちょことこすってみると拓本ができます。昔、みなさんもされたことがあるかと思います。10 円玉とか 100 円玉を机に置いて、それから紙を乗せて鉛筆でこすると、その形が出てくる訳です。拓本をおこなうことで、免田式土器の一番の特徴として挙げられる、重弧文という模様が出てきます。こういうものを自分で紙に写してみて、どういうふうに調べたことを自分でまとめていくか、そのようなことを考え実践することは自分の強みになります。これが活用方法ではないでしょうか。真ん中にあるのが本物の土器のかけらで、右のほうに書いてあるものが、拓本を切り取って貼り付けたものです。その部分がどんな形になっているかということを、子ども達に想像してもらいます。土器のかけらを復元していくと、その後どうなっていくのか、この角度と傾きではこの土器はこれぐらいの大きさだなと、その後内側が曲がっていくと底の方はどうなっているのか…。そのように想像してみることは、これから先に色んな遺跡で出土する、発掘されたものを自分なりに考えていく一つの材料になっていきます。もちろんこれは展示したものをただ見るだけでは、なかなか分かりません。やはり、自分の手にとって触って、活動することができる環境作りを目指すことが、私が取り

組みたい課題であり、今教育委員会にお願いしている部分でもあります。普通に展示しても、その中でもし使える土器があれば、子ども達に使っていただきたいと思っています。

これは昨日開催されたワークショップですが、文化協会はものづくりのお手伝いとして、作ったものを飾る紐を編む作業を特に行っていました。また、文化と歴史を楽しむ会にも色々お手伝いをしていただきました。ガラス玉作りもありましたが、私もできるものを作ってみました。費用は０円で、鹿の角を使っています。山に行くとある程度落ちています。また、私は猟友会に所属しており、山に行ってドーンと撃って鹿を捕ると、頭の骨とか皮はほとんど撃ち捨てて帰りますが、その時の顎の骨がこの部分です。この部分は持ち帰って、適当に切って紐を付けてみると、それなりのものができあがります。しかし、このままでは女性には好まれません。これはうちの園児の保護者のおじいさんが作ったものですが、この鹿の骨のこのような部分を利用して、キーホルダーにすると女性に喜ばれます。面倒くさい時は、これをそのまま穴をあけて、キーホルダーにすることもできます。このような活用の方法もあります。では、これが古代とどう結びつくかというと、2,000 年前、1,700 年前の人達はこのようなものを使っていろいろな道具をつくった訳です。もちろんこれらは、ものを磨く時や釣り針としても使われています。そうすると少し、つながりが出てくるのではないでしょうか。

簡単な事例ではございますけれども、子ども達が、直接触って、それを見て、考える環境づくりをきちんとしていただければ、その子ども達が色んなことを考えて、発展させる。それが一番大事だと思います。

○沖松主幹

ありがとうございました。

（４）遺跡、ワークショップと芸術活動～南種子町の事例～

講演者：石堂和博（南種子町教育委員会）

○沖松主幹

それでは最後の報告は、鹿児島県種子島からお越しの石堂和博先生です。石堂先生は現在、南種子町教育委員会に勤務されています。石堂先生には「遺跡、ワークショップと芸術活動～南種子町の事例～」として、報告していただきます。それでは皆様、大きな拍手でお迎えください。

○石堂和博氏

みなさん、こんにちは。種子島の南種子町から来ました、石堂和博です。広田遺跡ミュージアムという博物館があり、そちらの方で学芸員をさせていただいています。あさぎり町に来まして、志らき旅館に泊まっているのですが、旅館の目の前にコンビニエンスストアがあって、種子島と違い 24 時間開いているので、驚いています。それぐらい人口が少ない、6,000 人の町で学芸員をしています。たった 6,000 人の人口の町でも、身近なことからはじめれば何かができる、そういうことを事例報告させていただければと思います。

こちらは、私の勤めている広田遺跡ミュージアムの外観、国史跡広田遺跡、そしてそこから出土した重要文化財の貝製品の写真です。広田遺跡は、実は本目遺跡と同じ弥生時代の終わり頃から古墳時代にかけての遺跡です。分かりやすく言うと、卑弥呼の時代の遺跡です。卑弥呼の時代には、本目遺跡の免田式土器が奄美・沖縄といった南の島々まで行っており、もちろん種子島にも来ています。その頃、種子島では、砂浜に墓が作られ、そこに人々は埋葬されました。埋葬された一般の人々がこのような綺麗な貝製品を、ほぼ全員、95％の人々が身に着けていました。こういった、日本本土ではあまりみたことがないような遺跡です。

この遺跡は現在、史跡公園として整備がされています。実際に整備をする前に、遺跡の発掘から 5 年程かけて、色々なワークショップを行いました。また、町民の皆さんの意見を聞きながら色々な試行錯誤をしたうえで整備の計画を立て、ミュージアムを作りました。

このスライドは、実際に遺跡公園の遺構復元をする時に、地元の方々に参加していただいたものです。また、広田遺跡の前面にある海で地元の小学校 PTA と泳いでみようという企画をしました。実際に地元の方々と泳いでみると、この遺跡はすぐそばの砂浜に魅力があるという意見になりました。この地元の誇りである美しい海に遺跡公園から簡単にアクセスできる整備をした方がいいのではないか、というような意見がでました。そうした地元の意見を取り入れるために、地元の人々と一緒になって色々な体験活動をしてきました。

一番力を入れたのは地元の人々に参加してもらうための工夫です。佐古先生と一緒にやったプロジェクトですが、種子島、南種子町というところは宇宙センターがある土地です。宇宙基地が近くにあるということで、遺跡と宇宙をコラボした講演会をしてみようと、楽し

そうな講演会になれば、地元の方々がたくさん参加するのではないかというように考えました。しかし、それだけでは人は来ないということになり、広田遺跡のある広田集落の公民館で、ゲートボール大会をしました。種子島の高齢者の方々は、毎日毎日ゲートボールをされるほど、ゲートボールが大好きです。そのため、喜んでゲートボールをしに来ました。このスライドは佐古先生なのですが、大学の先生でゲートボール大好きな先生がいるから一緒にしませんか、と言った訳です。佐古先生は初めてのゲートボールだったのですが、そういうことにしてゲートボール大会をしたところ、60 人しかいない集落で 50 人以上、集落の方がほとんど集まりました。しかし、ゲートボールが終われば全員帰ってしまうため、これはいけないということで、ゲートボールの会場にあるセンダンの木に色んな暗幕を張って、一大交流会をはじめました。そうすると、先ほどまで一緒にゲートボールをしていたこともあり、皆さん集まって講演会を聞いてくださいました。佐古先生は話も上手いので、皆さん、食い入るように聞かれていて、その後バーベキュー大会をしました。このバーベキュー大会がコツで、実は妻木晩田遺跡っていう鳥取県の遺跡で語り部の会をしている方がそのチャンスに来られていました。その方とのお話のなかで、遺跡の価値を知って、それをみんなに伝えていくということは実は楽しいのではないかと、焼酎を飲みながら話すことで分かっていただけました。

その後、広田遺跡ミュージアムという博物館を作る際に、開館前より地元の方々を語り部さんということで位置づけて、学習会を開きました。実際のオープン時には、60 人しかいない集落のなかで、10 人の語り部さんが参加してくださって、現在ではこの広田遺跡ミュージアムを訪れる観光客には、この語り部さんが遺跡を案内するということを実施しています。非常に温かみがあるということで、語り部さんが説明してくださった方々は結構リピーターとして来られるようになりました。ただ、語り部さんは 1 日に 1 人か 2 人ぐらいしかいません。皆さんローテーションを組まれて、1 日に 1 人は館にいるというような体制をとっています。語り部さんは遺跡の価値を自分で伝えるため、自主的に勉強され、話せば話すほど遺跡に対して誇りをもっていただいています。遺跡について誇りをもつということは、その地域の歴史文化について誇りをもつということで、この町に自信をもって、活動してくださる方達が増えているということです。来館者は地元の人々も多く、地元の方々がそれまで地元のお友達の語り部さんから遺跡のお話を聞くことにより、より実感をもって広田遺跡ってすばらしい遺跡だということを感じていただけるという状況です。

最後に、あさぎりの町本目遺跡も、重弧文の免田式土器が非常に貴重だという遺跡です。お墓も貴重ですが、モノに焦点が当てられる遺跡です。広田遺跡については、広田遺跡から出土した非常に綺麗な貝製品、この種子島の古代人がつくった美術品といえる貝アクセサリーが地域の誇りになるのではと考え、貝殻のワークショップが展開されています。どのようなワークショップかと言うと、先ほど本目遺跡の免田式土器はかっこいいと、佐古先生が言われましたが、古代人のつくったものは現代の感覚でも美しい、かっこよいという意見から、それを活かすため、アートとコラボするということを考えております。二通りの方法を考えていて、一つは地元の文化協会とコラボして、貝殻で美しいものを作ろう、みんなに楽しんでもらおうというものです。もう一つの方法は、実は先ほどの十文字先生は多摩美術大

学の先生なのですが、南種子町でも多摩美術大学の宇宙芸術を専門とされている先生とコラボして、「遺跡と宇宙芸術」という企画展を開催したり、また、その新たな視点でもう一度遺跡を見直そうという動きをはじめております。これらは、10 月 31 日から 11 月 15 日まで、南種子町の方で企画展を行っているため、もし南種子町に行きたいという場合は、ぜひいらしてください。

このように、遺跡というものを自分達で語っていくことによって、町に自信をもって、町が元気になってくるということと、アートな方々、文化協会の方々も、昔この町には美しいものがあったということを知って、それを活用することで、自信に溢れた町民の方々がいれば、観光に繋がると中川先生がおっしゃっていました。それを私は心の拠り所にして、今実践をしている最中です。ぜひ、あさぎり町でも参考にしていただければありがたい、と思っております。

○沖松主幹

ありがとうございました。以上をもちまして、4 名の先生方による、事例報告を終了させていただきたいと思います。この後ですね。5 分ほどでパネルディスカッションに移らせていただきます。

４．第３部　パネルディスカッション「文化遺産とまちづくり」

コーディネーター：中川幾郎氏

パネラー：愛甲一典町長、西村幸夫氏、藤島紘陽氏、犬童賢二氏、浦本真道氏、佐古和枝氏

○沖松主幹

まず、御登壇いただいている方々の紹介をいたします。

まず舞台下手より、あさぎり町の愛甲一典町長です。その隣は先ほど記念講演をいただきました西村幸夫先生です。その隣は地元あさぎり町下乙地区の宣徳寺住職の元免田町教育委員の藤島紘陽先生です。その隣は先ほど事例報告をいただきました、あさぎり町文化協会の犬童賢二先生です。その隣はオープニングで躍動的なエイサーを御披露いただきました、火の国エイサー琉跳会の浦本真道先生です。そして先ほど事例報告をいただいた、関西外国語大学教授で本目遺跡発掘調査団の佐古和枝先生です。

それでは、ここからからはコーディネーターの帝塚山大学名誉教授の中川幾郎先生に進めていただきたいと思います。それでは、よろしくお願いします。

○中川氏

はい、それでは第３部をはじめさせていただきます。１部と２部と、理解していただいたうえで、町長さんから、今日は色々なお考えが出てきたと思いますので、御感想を御披露いただけたらと思いますが、ちょうど町長さん相手に質問がきています。読み上げると、「今後の情報発信、町づくりに町長さんの意見を聞きたい」、「どのようにすすめていくのか、住民は見守りしています。具体的な取り組みをお願いします」、「やる気のある学芸員に力を借りたいです。町づくりにワクワクします」。このような質問がきていますが、まず、町長さん回答をお願いします。

○愛甲町長

まず、佐古先生、20 年前の本目遺跡発掘から今日まで、本町にお越しいただき、本当にありがとうございました。そして、西村先生をはじめ皆様方、御参加いただいてありがとうございました。

一言で言うと、このわが町にある文化遺産に目覚めた、まさにそういう日でした。これだけ一つの町に、想像を超える遺跡等があるということ、本当にしっかりと自覚をさせられました。本日、この場には町議会議員の皆さんも何人か来ておられますし、一緒にそういう認識をしあう日であったと、私はそう思っています。

今言われました、情報発信ということですが、やはり今後は幸福駅あるいは薬師さん（谷水薬師）等について、現在、国が進めている地方創生に向けて、地元にあるものを活かしたいと考えているため、本日色々言っていただいたこと、すべてを参考にして、取り組んでいきたいと思いますし、またフェイスブック等の様々な情報がありますので、本日御提案いた

だいた方法とともに、町の情報発信をいかにやっていくかについて、真剣に今後取り組んでいきたいと思っています。よろしくお願いします。

○中川氏

随時、また皆様方の御意見を伺えたら紹介していきますが、藤島紘陽先生の方から、今日のシンポジウムのなかで、色々考えられたことをおっしゃっていただけますか。

○藤島紘陽氏

私は本日、20 年前の本目遺跡調査に関して、本目遺跡のある地元の一人として参加をさせていただいていますが、佐古先生のお話でもあったまちおこしの点から、当時の旧免田町が取り組んだことについて、私なりの検証をしてみたいと思います。

まちおこしについて、「他所の視点／余所者」「若者」「馬鹿者」という中川先生の言葉があります。「余所者」というのは、当時同志社大学の森先生に気づかせていただいた考え方です。これは、森先生が『アサヒグラフ』で掲載されていた記事のなかで、この鑾金鏡に関する記事があり、それを町の人が気付き、情報発信していこうという流れであった訳です。その宝については、先ほど佐古先生のお話しでありましたので、私は申しませんが、一つは、日本の土器の中で大変立派な日本一と言ってもいいほど気品のある、重弧文をもった免田式土器、これが本目遺跡から出土したということ。もう一つは、これも大変貴重な、日本にある 3 枚のなかの 1 つの金メッキの鏡である鑾金鏡です。このようなお宝があるということを、他所者である森先生によって教えられ、気付かされて、何とかまちおこしにつなげられないかと考え、私が先ほど言った「馬鹿者」が入っていきます。それは誰かというと、当時は役場職員であり、現在はあさぎり町の町議会議員であります山口和幸さんと、当時の植薄町長、加えて職員の皆さん、そして町民の皆さんが立ち上がり、「クマソの復権」ということでまちおこしに取り組んでいきました。

そこで、まずは本格的な調査をされていなかった本目遺跡の調査が実施されました。それと同時に、町では町長を団長として、鑾金鏡のルーツを訪ねようと中国に行くこととなり、文化財保護委員、町議会議員、教育委員が同行し、専門家や中国の何件かの博物館を訪ねました。そして、中国で考古学の最高権威である王士倫先生とお会いして、貴重なお話を伺いました。そのほか町では、このクマソ復権をテーマにしたドラマを作ろうということになり、1 時間のテレビドラマが作成されました。

官民あげて色々と取り組んでいきましたが、しばらくすると、その熱意が冷めていってしまいました。その理由は、町が今度はまちおこしの拠点をおかどめ幸福駅に移していったためと思います。くま鉄が民営化されて、新駅を作ったときに、普通ならあの駅の名前を西免田駅か岡留駅とかするところに「幸福」という字をつけました。これは、当時大人気であった岡山の幸福駅を意識してのことだったと思いますが、案の定、それが当たり、旅行会社が

目をつけてツアーの対象にしたところ、多いときは福岡等からも訪れるようになりました。そのため、町は人も予算もそちらの方に向けていきました。その動きというのは道路を整備し、駐車場あるいは売店を設置するというものであり、その分次第に本目遺跡をはじめ、クマソ復権の機運というものが、町民の意識からも離れていったというように私は考えています。

つまり、まちおこしの観点からすると、「余所者」「馬鹿者」までは良かったが、最後のこれから受け継いでいく「若者」がその時に備わっていなかったということだと思います。なぜかというと、原因はやはりすべて行政主導であったことだろうと思います。行政が火付け役になることは良いことですが、やはり引き継いでいく存在が足りなかったため、そのような意味では少し残念だったと思います。その風あたりについては、先ほどのお話の中でもよく分かりますし、何かやろうとしても、なかなか町や教育委員会は動いてくれないと言われますが、発掘当時の先生達もやはりご苦労された分、何か地元に恩返しをしたいという思いで来られていますが、それも何か思いがかみ合わないもどかしさがあるだろうと思います。その辺りのところはどうするとよいかということについて、お時間があれば先生方に教えていただければと思います。よろしくお願いします。

○中川氏

ありがとうございます。今のお話を当時小学生で参加しておられた浦本さん、先ほどのお話に関して、当時の体験から今までのなかで、改めて考えてみて、どのようにしていくとそれが繋げていけるか、あなた方の将来のためになると思われますか。

○浦本真道氏

はい、私も肩を並ばせていただき、一緒に作業したことがありましたが、僕が小学校 5、6 年生だった当時は、父（浦本秀正）が教育委員会におり、佐古先生がいらっしゃった時は、本当に遊び場のように、僕も発掘現場に行っていました。先ほど、少し写真にも写っていましたが、やはりその当時は大人が受け入れてくれる、包容力のある時代だったかと思います。遺跡という、僕らからするとまだよくわからない未知なもの、しかし、いかに大切なものを掘り起こしている場に、小学生のちんちくりんな子どもが遊びに来て、大人と同じようにハケを持ったり、竹串を持ったりしながら、遊びでしていることを許してくれるような雰囲気があって、同級生とも話しますが、僕にはすごくそのことが今でも記憶に残っています。今は、僕も親ですが、やはり子どもを放っておけないということを思いますので、先ほど言われました、子どもがいろんな体験ができる、そのようなまちづくりが重要ではないかというように思っております。

○中川氏

今も、子どもという言葉を言われましたけれども、実は、私も 10 近い都道府県、市町村

の文化審議会の会長というのを務めていますが、そのうちの 7、8 割が重点を置いているのが、子どもを対象とした施策に力を注ぐ、ということです。特に小学生。彼らが色々なことに参加して、町の郷土の歴史収集や、郷土の文化財を知る等、例えば滋賀県は、全部の小学校で、卒業するまでに一度はピアノ公演やオペラを聞かせるという施策を行っています。これが滋賀県の誇りになっており、後々効果が出てきます。つまり、地元を離れていた子も、どれだけ遅くても 7、8 年から 10 年で町のパワーとして帰ってきます。そのため、今からでも遅くありません。子どもを大事にすることで、子ども達もその町の歴史を大事にするようになります。現に浦本さんがそれを感じてくれている訳です。あなた方が免田式土器に関わったことを覚えていて、「それを今やろうか」と言うのは、本当にこの町を愛している郷土人だということです。

そして、それをずっと提言しているのが佐古先生であり、郷土のために考古学を手ほどきされ、わかりやすい本をたくさん出されています。その観点から、子どもと考古学について、少し教えていただきたいということと、これは質問カードからですが、「エイサーを踊る沖縄と球磨の関係がよくわかりません。なぜエイサーかなと思ってしまいます。20 年前の免田式土器が、どのような関係で沖縄から出土したのかを教えてください」ということです。

○佐古氏

まず一つ目、子ども達と考古学についてですが、私がなぜ考古学を始めたかについて、簡単にご説明します。私は鳥取県の出身であり、大学への進学で京都に行きまして、「お前どこから来たんや」という問いに、「鳥取です」と答えると、「鳥取って岡山、広島の方か」とか、たまに鳥取を知っている先輩がいると思うと、「人口が一番少ない県やな」、「市町村の数が 4 つしかないってほんまか」、「3 回勝てば甲子園いけるんやろ」等、そのようなことばかり言われました。外に出てみて初めて、私の故郷というのはいかに印象のうすい県かということに、初めて気が付きました。別に郷土愛に燃えている訳ではなかったのですが、「あーそうなのか…」というように感じました。そんな時に、たまたま夏に帰省してニュースを見ていると、鳥取の古墳で壁画が見つかりすごいニュースになっていて、その時にコメントを述べている人が、その年にたまたま授業を受けていた同志社大学の森浩一という教授で、「あー顔を見たことがある先生だな」と気付きました。そして、鳥取にも古代にはすばらしい高度な文化があったと言われていて、散々鳥取県はしょうもない県だと先輩達に言われていたところに、考古学から見ると、どれほどすごい我が故郷があるのだろうかと思い、少し覗いてみたのが運のツキで、今日に至っています。

クマソの『古事記』『日本書紀』では、復元できる歴史はひどく限定されているのですが、考古学を歴史研究に使うと、どんな町でも歴史が復元でき、それはしばしば文字の内容と少し違っていたりと、本当にここに暮らしていた私達の祖先が遺したものが見つかります。そのため、考古学であれば、こんなに素晴らしい遺跡があるんだよと、地元の子ども達に伝えてあげることができます。そして、子ども達が大きくなって外に出て、町のことを聞かれた時のために、せめて一つは話せることを子ども達に伝えておいてあげたいと思っています。私の故郷は何にもない、つまらないところだと、私のような寂しいことを思ってほしくない

と思います。

そのような意味では、あさぎり町にはたくさん子ども達が誇れるものがあることを、伝えてあげたいというように思っています。それから考古学はモノがあるため、もう理屈抜きで、土器のかっこよさや重弧文等、昨日は色々な話をしましたが、そのような理屈じゃないところで子ども達が色々想像を膨らませたり、古代人の気分になってみたりできるということでは、子ども達の良い素材であると考えています。ですので、ぜひ子ども達に考古学を披露していただきたいと思います。

二つ目の質問は少し長くなりますので、また改めて説明させていただければと思いますが、ただ免田式土器は随分と広がりをもち、ダイナミックに流行することから、沖縄ということと、たまたま浦本さんがエイサーをしているということでしたので、あさぎり町から沖縄への広がりというのを皆さんにイメージしていただくために、このオープニングになりました。以上です。

○中川氏

お分かりいただけたでしょうか。それでは、犬童先生、今日の全体シンポジウムをお聞きになって、何かもう一つ新たな御意見があれば、少し教えていただけますか。

○犬童氏

私も、子ども達に、いかにあさぎり町のことを伝えられるかということを考えさせられました。

○中川氏

方法としては、例えば、本や物語化・ストーリー化してパンフレットを作って、「楽しいことがここにもあるぞ」ということを紹介するというのがあるかもしれません。

「クマソ復権」というのを森浩一先生が提唱されたということを聞きますが、やはりこの「クマソ復権」というのは継承すべきだと思います。その理由としては、現在は地方分権の時代ですが、全て日本国政府が言うとおりに動いていると、自治体はもちこたえられません。現に日本国政府は、1100 兆円の借金を地方と合わせてもっていて、そのうち 800 兆ぐらいが国で、地方が 250 兆ぐらいだと思います。これだけの大借金を抱えているため、もう国がこれ以上頼りにはなりません。自治体がより自立して、自分達の経営力に切り替えていかないと、これから日本の地方自治はもうもちこたえられません。そのような意味で、クマソはとても良いと思います。そのパワーをもっと回復したい、このような志は皆さんにもっていただきたいと思います。

それから、エイサーについてですが、私の話の中でコントラストと言いました。これは、球磨という土地に異物のようなエイサーが入ることで何かざわめきが起きる、つまり、空間を復元させる、揺らしている訳です。これは良い意味で「揺れている」と思います。今一度、ガンガン揺るがさないと駄目だと思いますので、良いことだと思います。トリエンナーレという、田んぼのど真ん中に非常に前衛的なアートの作品が次々と立った時も、地元の人は皆

あっけにとられていました。「なんじゃこれ」という感じです。まずは「なんじゃこれ」から始まり、それがだんだんと連続性ができてくると、その土地の文化に土着化していきます。

あの古町・奈良でも、「バサラまつり」というのを行っていますが、子どもや若者達がすごく衣装を凝らして、踊りまわっています。僕は、これはよさこいソーランよりも、はるかにクリエイティブで独創的だと思っています。奈良の市民達は、楽しそうに参加しています。「面白がる」という文化も必要なのだと思いました。あとは、文化遺産を閉じ込めるのではなく、いかに開放して町のエネルギーに変換するかという観点からも見てほしいと思います。パネラーの皆様方、ありがとうございました。

○沖松主幹

ありがとうございました。まだまだお話を伺いたいところでありますが、本日は「時間・空間・人間とまちづくり」というテーマについて、予定時間をオーバーしての中身の濃いディスカッションを行うことができました。これをもちまして、パネルディスカッションを終わらせていただきますが、ここに御登壇いただいております、そして、コーディネーターの先生方にお礼の意味を込めまして、お礼の拍手をお送りしたいと思います。

ありがとうございました。どうぞ、御降壇ください。

５．閉式・挨拶

〇沖松主幹

すべて滞りなく終了することができました。つたない司会・進行でしたが、務めることができました。最後に主催者を代表して、お礼の言葉と閉会を中村富人あさぎり町教育長が申し上げます。

【閉会】

〇中村富人教育長

失礼します。まずはお礼を申し上げたいと思います。記念講演をしていただきました、西村幸夫先生、中川幾郎先生におきましては、多忙なスケジュールのなかで、あさぎり町までおいでいただき、お世話になりました。心より御礼申し上げます。そして、本目遺跡発掘に関わられ、御協力いただいた地元の皆さん、また昨日の関連イベントから本日のシンポジウムまで、また本日御来場いただきました、たくさんの町内外の皆様にも合わせて御礼を申し上げます。

以上をもちまして、本目遺跡発掘 20 周年記念、あさぎり町まちづくりシンポジウムを閉会いたします。これで終わります。

平成 27 年度開催
本目遺跡発掘 20 周年記念
あさぎり町まちづくりシンポジウム
－講演録－

あさぎり町教育委員会
2022（令和 4）年 9 月